



青森飛行場の広大な敷地 1933（昭和8）年頃・青森県史編さん資料

1933（昭和8）年6月11日、油川町にできた青森飛行場の竣工式が盛大に行われた。当日は青森市をはじめ、近隣町村からも多くの人が詰め掛けたという。

当時の新聞によれば、青森飛行場の建設計画は、前年の1932（昭和7）年7月14日付で逓信省が救農土木工事として青森市付近に建設すると発表したことに始まる。救農土木工事というのは、1931（昭和6）年の東北地方の大凶作に伴うものであった。そして、飛行場の建設地が油川に決定したのはこの年の9月30日のことであるから、約1か月半という短期間に候補地の選定が進められたということになる。まさに、飛行場建設が救農土木事業であったことを物語っている。

さて、飛行場の建設地を目を向けると、青森市周辺

のいくつかの町村が誘致に

名乗りをあげた。それを新聞報道で見ると、1932（昭和7）年9月11日

こうして、飛行場建設は有力三候補地を軸に進んでいたようだが、調査団の来

青に前後で内容が異なっていることに気づく。

青により事態は一変する。日に県が現在の青森市佃地区にあった青森競馬場付近

すなわち、7月14日の計画発表から調査団来青までの

をノミネートしてきたのである。しかも、市街地に隣

期間、横内村雲谷平、油川町、荒川村の有力三候補

接する競馬場については調査団も大乗り気で、候補地

地に加え、高田村、青森市

選定をめぐる新聞論調も一変し、に

八重田地区が名乗りをあげていた。

ところが、青森市会はこの提案を拒否した。県は青

青森飛行場誘致運動

工藤 大輔

（青森市市史編さん室長）

わかに競馬場付近が最有力候補として報じられるようになった。

であった。

青森飛行場が油川町に誕生して6年後の1939（昭和14）年、油川町は青

そのなかでも、とくに、雲谷平と油川町とが有望視

森市に相応の土地買収費の寄付を求めたが市会は頑なにこれを拒否し、代替地に

に飛行機の離着陸を経験していたこと、さらには土地

抱えていた浜館村の水田地帯を提案した。ただ、浜館

の無償提供が可能であったことが強みであった。一方、

村会も断固これを拒否した。

油川町は青森市へのアクセ

空港建設地は最終局面にきて暗礁に乗り上げた。調査団は、高田村、新城村の

スがいというメリットはあるものの、土地を無償提供

供することには難色を示した。

空港建設地は最終局面にきて暗礁に乗り上げた。調査団は、高田村、新城村の

地内の調査をするなどさらなる候補地を探した。さらに、一旦は可能性が潰えたかにみえた荒川村が、旧刑務所跡地の無償提供を示唆した。ただ、調査団は9月29日の時点でも青森競馬場

付近を諦めきれず、最後まで建設地の決定は難航した。ところが9月30日、飛行場は油川町に設置することが決まり、調印にこぎつけるまでに至った。新聞の見出しが「急転直下の」と報じるように、飛行場の誘致問題は一気に収束したのであった。